

2020.01.26

「主の祈り」03

「私たちの罪をお赦してください」

マタイによる福音書

6:12 わたしたちの負い目を赦してください、

新共同訳聖書でも、新改訳聖書でも「わたしたちの負い目を赦してください」と訳されており「罪を赦して下さい」という言葉とは違っています。しかし、「負い目を赦す」ということを説明しやすくするために、「罪を赦す」という出来事から話を進めて行こうと思います。

「罪」とは何かということから説明が必要です。

1) 罪とは

聖書の中の「罪」とは犯罪とか悪いことというのとは違う意味があります。罪という言葉は「的外れ」という意味がありますが、その的外れについて、創世記の出来事を理解することが必須です。

*人は神の形に創造され、神の心を受け止めることができるよう創造された

*2:7 主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。

人はこうして生きる者となった。

*2:16 主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。2:17 ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」

*しかし、人間はその木の実を取って食べてしまいます。

*3:22 主なる神は言われた。「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。」

これらの部分では、人は神に背き、善悪を知る知識の木の実を食べてしまったことで「的外れ」がはじまりましたということと、ここに的外れの深刻な根源があることを教えています。

つまり、それまでは神の霊により、神の心と一致して生きることができていたのに、善悪の知識の木の実を食べたことで、人間の心に「神と同じような善悪を決める事ができる」という錯覚が生じるようになりました。今までは「神と一体の心」だったのに、これ以後、神の心とは別に自分の決断が神の意志よりも上に存在することが可能であるという錯覚が生まれたのです。心の中にふたつの重心が生じることになりました。

神の王座と自我の王座が、すべての人間の心の中に据えられることになったのです。

ですから、重心がふたつありますから、どこに投げても、思い通りにはボールはバウンスしないし、戻ってきません。的外れが常に生じるわけです。

2) 心の中のふたつの王座

本来は、神によって創造された私たちは、神の心のおりに生きられればそれが最高だとわかっているのです。でも、もうひとつの価値判断の基準が心の中に育っているので、常に反目し、迷い、決めたいと思っても安心できず、どういう結論を出しても「的外れ」的な反応しか出てこないのです。

頭では、これは悪いことだとわかっている、それをやめることができない、とか、これは良いことだとわかっている、それを選ぶ事ができない、という問題はまさに、自分の判断基準が神の基準と同等の位置にあるからなのです。

3) 罪の赦し：罪ある自分自身、存在自体への赦し

何を決定しても、どこかに「的外れ」な部分があるわけですから、神の心を満足させることはできません。

罪の赦しというのは、そういう「的外れな存在」である私たちの存在そのものが生み出した「神への悪」「神への迷惑」「神の心を痛めるすべての行為」を全部イエス様が処理してくださったということなのです。

コリントの信徒への手紙第二 5 章にパウロはこう書きました。

5:15 その一人の方はすべての人のために死んでくださった。その目的は、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きることなのです。5:16 それで、わたしたちは、今後だれをも肉に従って知ろうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません。5:17 だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。5:18 これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。5:19 つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。

5:20 ですから、神がわたしたちを通して勤めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。

5:21 罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです。

つまり、イエス様は私たちが生きている限りずっと、私たちのありのままの「的外れ」状態につい

て「赦しを宣言」し「赦しのための苦難」を指し示してくださいます。

自分でも呆れるほどの「的外れ状態」が常態化している、ということに気づく必要があります。

つまり努力や修養で悪い習慣をやめることができたとしても、心の中のふたつの王座については自分では処理不能なので、いつ、自我の王座が優位を占めるか自分でコントロールできないのです。

「神に愛され、守られ導かれて歩みたい自分」と「神など不要、神に従いたくない、すべての権威に反対」という自分が、ひとりの心の中に共存しているのです。どう考えても、そこから出てくる結論は「的外れ」にならざるを得ないのです。

でも、キリストはそういう私たちのために死なれ、聖霊を送ってくださいましたので、神の心を以前より明確に理解できるようにさせてくださいました。祈りも賛美も礼拝も、そういう心を研ぎ澄ますために必要なものなのです。神に近く歩むために必要な作業ということが出来ます。黙想も、聖書講読もそのために重要です。

罪の赦しは、私の行ったあの悪いこと、この悪い考えを赦して下さいということだけではないのです。存在自体が生み出している「的外れ」状態を認め、そこの部分に神の恵みの赦しが届くように、そして神の心を大事にしながら生きられるように願う心をもって生きられるようにという願いこそ「罪の赦し」の祈りなのです。

個々の「過ち、負い目」に関する赦しは、そういう罪の理解を土台にしてさらに意味あるものとなってきます。

罪の赦しは、間違いなく、イエス様の十字架によって成し遂げられました。

心の中の自我の王座による的外れな存在は「処罰され、赦し」が届きました。ただ、私たちが肉体をもって生きている限り、その残骸というか、その傾向は残っているのです。ですから、イエス様

とともに十字架によって処分され、死んでいるはずなのに、生きている自分を発見するわけです。でもこれは矛盾ではありません。肉体の持つ限界なのです。ローマの信徒への手紙7章にはその事が書かれています。

そして重要なことは、わたしもあなたも「的外れ」な存在だったという事実です。私は正しくあの人とは間違っているなどと簡単に言えるほど、私は正しい存在ではなく、私もあの人のも的外れなのだという視点で人を見ることが大事になってきます。寛容さ、赦す心はそのへんから育つのかもしれません。